2025 年度　人類文化研究コース　学生派遣事業　研究成果レポート

伊藤 紫

１．事業実施の目的

日本文化人類学会第 59 回研究大会での口頭発表及び博士論文執筆のための文献調査

２．実施場所

筑波大学（茨城県つくば市）・国立国会図書館東京本館（東京都千代田区）

３．実施期日

2025　年　6　月　6　日（　金　）～　　2025　年　6　月　9　日（　月　）

４．成果報告

●事業の概要

本事業では、2025 年 6 月 7 日・8 日に筑波大学にて開催された日本文化人類学会第 59 回研究大会で口頭発表を実施するとともに、国立国会図書館東京本館にて、報告者の調査対象である尾張もめん伝承会及び全国の織物の伝承会・保存会についての文献収集を行った(6 月 9 日)。

日本文化人類学会は、人類の文化を研究する文化人類学、社会人類学、民族学などの発展と普及を図ることを目的とする学会である。2000 名近い会員を擁し、機関誌の発行、年 1 回の研究大会や全国各地での研究懇談会など、幅広い活動を行っている。

第 59 回研究大会では、163 の個人発表と 11 の分科会、開催校企画ラウンドテーブル「留学生×教育機関×人類学：文化人類学者は留学生支援にどうかかわりうるか」、フィールド教育ワークショップ「人類学と医学教育の対話」、ブックトーク、学会賞受賞講演などが行われた。その中で、報告者は 20 分間の個人発表を実施した。

多くの発表・講演等の中で、筆者が特に注目したのは、東京科学大学博士後期課程の小澤茉莉さんによる個人発表「埼玉県秩父地域における養蚕をめぐる民族誌―3 世代の養蚕農家のライフヒストリーに注目して―」である。小澤さんによれば、国家（農政）による養蚕・製糸の統制体制が解体する過程で、養蚕業の捉え方は国家を支える産業から文化振興の文脈へと移り、養蚕農家の取り組みも変化してきた。国の施策の変化と産業衰退の影響で文化振興の文脈が強調される過程は、報告者の研究対象である織物生産やそのための木綿栽培にも通ずる。その一方、養蚕業をめぐる国策や文化振興があくまで農政・農業団体の管轄下にある点は、染織など工芸品の文化保護・産業振興制度とは異なり、興味深い。担い手の仕事への向き合い方に行政施策が及ぼす影響を分析する視点と、それが素材・工程等によって異なる点は、報告者の博士論文執筆においても示唆に富むものである。

国立国会図書館東京本館では、日本各地の織物の伝承会・保存会及びそれに関連する博物

館講座について文献を調査した。主な対象は、展覧会図録等の博物館による発行物や、伝承会・保存会による活動記録誌である。これらを調査することで、各団体の活動概要を把握し、尾張もめん伝承会との比較や、織物伝承会・保存会をめぐる社会的動向の分析につながる情報を得ることを目指した。また、尾張もめん伝承会及びその母体となった博物館講座で講師を務めた人物の著作についても収集した。講師の経歴や専門分野については、これまでの文献調査と聞き取りからある程度の情報を得ているが、本調査によってその確認・補完を行った。

●学会発表について

本発表のタイトルは、「織物技術の生涯学習を支えるもの　博物館講座と伝承会の形成期における熟練者不在の学びの様相」である。報告者は、伝承会（保存会）による織物制作・伝承が、社会背景・生活の中でいかに行われているのかを明らかにしたいと考え、博士論文を執筆している。そこで、本発表では、愛知県一宮市で活動する尾張もめん伝承会とその母体となった博物館講座の形成期に焦点を当て、受講生・会員たちが、何をモチベーションとして、いかに織物技術を習得し、いかに継続性のある織物生産の学びの場として講座・伝承会を形作ったのかを論じた。

そこで問題となるのが、当講座・伝承会の初期には、講師の技術が熟練とは言えず、熟練者の指導を仰げなかったことである。熟練者不在の講座・保存会で、何が技術習得と活動継続を支えたのか。

参加者からは、専門的な技術継承と趣味活動の間に位置づけられるという本事例の特徴が指摘され、趣味ともいえる活動の中で、伝承がいかに意識されてきたのかについて質問があった。また、制作した織物の扱いについて問われた。これらへの回答とディスカッションを通して、伝承活動と学術研究・博物館活動との結びつきや、手間のかかる技術にこだわってセミプロ化するが、手間のかかることもあってプロにはならないという事例の傾向が示唆された。さらに、参加者から、熟練者がいる／いないことは、単に人の存在と考えるだけでなく、熟練者を形成する／しないシステムの差異や変化と捉えられるのではないかという指摘など、考察を深める手掛かりになるコメントが寄せられた。

●本事業の実施によって得られた成果

日本文化人類学会第59回研究大会では、発表及び参加者とのディスカッションを通して、事例の特徴がより明確になり、考察を深めるための手掛かりが得られた。この成果を反映して発表内容を論文にまとめ、学術雑誌に投稿するとともに、博士論文の一部とする予定である。また、参加者から関心が寄せられた、伝承がいかに意識されてきたかという点は、今後、伝承会活動の変化や伝承会員個人の社会関係・取り組みを論じる章でも取り上げる予定である。今後の調査と博士論文執筆で注目すべきポイントの 1 つを明確にできたことも、本発表で得られた成果である。

加えて、先述の小澤さんはじめ他の研究者の発表を通して、博士論文執筆に活かしうる知見・視座を得ることができた。布・繊維やものづくりを対象とする他の院生・若手研究者との交流もでき、今後の研究活動の助けになると期待できる。

国立国会図書館東京本館での調査では、川越唐桟手織りの会による『平成の川越唐桟』（上・下）・『川越唐桟手織りの会 20 年の歩み』や、倉吉絣保存会を取り上げた『倉吉絣　ふるさとを織り継ぐ』（倉吉博物館特別展図録）等、日本各地の織物の伝承会・保存会に関する文献を閲覧し、それら団体の活動概要を把握するとともに、制作している織物について確認することができた。また、尾張もめん伝承会の講師の著作を網羅的に収集し、講師の専門分野や関心について、聞き取り調査のデータを補うことができた。これらの情報は、織物伝承会・保存会をめぐる社会的動向の分析や、尾張もめん伝承会の特徴の考察に役立つと見込まれ、博士論文執筆に欠かせない成果である。

●本事業について

本事業の採択により、報告者は経済的な心配なく学会発表を実施することができ、博士論文執筆に欠かせない文献調査を行うことができた。

学会では、発表及び他の研究者の発表を聞くことを通じて、博士論文の執筆を進めていくうえでの重要な示唆が得られた。そして、他の院生・若手研究者と交流し、今後の研究活動に欠かせない横のつながりを広げることができた。また、国立国会図書館で調査した全国各地の博物館の発行物や織物伝承会・保存会の記録誌等は、所蔵者の少ない貴重なものが多く、実物の織物見本が添えられているものもある。本事業によって、そのような資料を直に閲覧し調査することができた。

本事業の採択に携わってくださった先生方並びに事務の皆様に心より御礼を申し上げる。今後とも学生派遣事業が継続されることを切に望む。